書楼弔堂

しょろうとむらいどう

はぎょう

破曉

探書壱　臨終（りんじゅう）　〇〇七
探書弐　発心（ほっしん）　〇八九
探書参　方便（ほうべん）　一六九
探書肆　贖罪（しょくざい）　二五五

目次

探書伍　闕如（けつじょ）　三三五
探書陸　未完（みかん）　四一七

装画　月岡芳年

装幀　菊地信義

書楼弔堂　破曉

探書壱

臨終

りんじゅう

葉桜は夏の季語だそうだ。

道の両岸の桜樹の繁り具合は真に旺盛である。

青青と誇らしく繁り、もう葉桜と呼べるような状態ではないが、まだ世間は暑くはない。夏までにはまだ間がある。過ごし易いと云えば聞こえは良いが、天候が不順なだけなので、気が晴れることは殆どないのである。

鈍鈍と漫ろ歩きで幅広い坂を下ると、手遊屋が一軒ある。

何度通っても唐突な感を覚える。景色に馴染んでいない。それでも客は来るようで、店先にはいつでも親子連れが一組二組はいるのである。

今日も、七歳か八歳くらいの学帽を被った洟垂れ小僧が、加藤清正の仮面が良いと駄駄を捏ねている。母親は金太郎の方が良いと云っているようである。売り手の親爺は、鉄砲だか洋剣だか上等の玩具を売り付けようと、あれやこれやと売り文句を投げ掛けているが、親は聞く耳を持たぬようである。

店主は児童の顔色を窺い、洋剣を提げるなら清正の方が断然似合いまする、残念乍ら鉞はございませんしなあと、妙な口上を述べている。合わぬと云うなら何方にも合わぬ。洋剣を提げた清正公の方が余程滑稽な絵面である。そんなもので虎退治など出来るものかと思う。虎退治なら片鎌槍だ。そもそも清正だろうが金時だろうが面は面、値は変わらぬのだろうし、この親は何故に清正を嫌うものか。いっそ、ひょっとこの面にでもしろと、通り過ぎ乍ら思う。

手遊屋を遣り過ごし、暫く進むと横径がある。

越して来てから三月、この大路は能く通るが、横径に這入ったことはないから、先に何があるのかは知らない。

息が切れたので径の入り口で立ち止まり、その先に顔を向けると、何処かで見掛けたような人影がせっせと近付いて来るのが見えた。袢纏を着込み、ハンチングを被り、背負子のようなものを担いでいる。

ハテ誰だったかと目を凝らせば、四谷の書舗の丁稚小僧である。名前は慥か為三とか云ったと思う。こちらに気付かず通り過ぎようとするので、為さん為三と声を掛けてみた。

案の定振り向いた。

印半纏には交差した斧の絵印が付いている。斧塚書店の商標である。

為三は首だけ振り返った恰好のまま、目深に被っていたハンチングを右手の人差指で一寸押し上げて、眼を円くし、おやまあ旦那さんと云った。

「こんな処で何をしていらっしゃる」

「何をしていらっしゃるじゃあない。僕はこの先に住まっているのだ」

そうでしたかいと丁稚は驚き、身体を返して向き直った。

「でも、高遠の旦那さんは、紀尾井町だか一ツ木だか、あっちの方のお屋敷にお住まいだったのじゃなかったですか。以前に掛け売りのご集金に伺った覚えがございますけれど、手前の覚え違いでございましょうかな」

「いや、三月前に越したばかりさ。なァに、疾の療養だ」

おやまァご病気でしたかいお見舞い申し上げますと為三は大袈裟に云った。

「大層なものじゃあない。微熱が続いて咳も出る。もしや癆咳かと怪しんで、医者に相談する前に閑居を探して移ってしまったんだ。家族に伝染しちゃア大ごとだと思ったのさ。だから屋敷はそのままある。母も妹も、妻子も彼処に住んでいる」

為三はおやおやそりゃいけないと云って、手で口を覆った。

「そう心配することはないよ。感染りゃあしないから。なァに、蓋を開ければ只の風邪だったのだ。風邪を押して引っ越しなどしてしまったものだから、却ってこじらせてね。治るのに半月もかかったが、今はもう何処も悪くない。悪くはないが、独り暮らしも悪くない。折角借りたのだし、暫く住んでみようと思ってね」

「はあ。お仕事は」

「半年ばかり休暇を貰った」
ひゃあ、と為三は声を上げる。
「そいつはいいご身分だ。流石にお大尽は違いますねえ。豪儀だ豪儀だ。あやかりたいですな」
「そんな良い身過ぎじゃないよ」
多分、仕事に戻ることは出来ないのである。辞めると云えば角が立つ。だから休むと云っただけだ。向こうも無駄飯喰らいがいなくなれば楽にもなるだろうから、止めることはなかろうと思ったのだが、思惑通り止められることも、咎められることすらなかった。
経営が苦しいのだ。
勤め先は将軍煙草商会と云う。大層な名前だが、煙草の製造販売業としては後発の、小さな会社である。
休む間禄は要らぬと云った。元の主筋の嫡子として特別扱いを受け、それなりの給金を貰っていた身であるから、少しは資金繰りの足しになるかとも考えたのだが、それでもその程度では焼け石に水、半年保つとは思えない。所詮士族の商売は付け焼き刃、上手く行く訳もないのだ。
「父上様の縁故で採用して貰ったがどうにも肌に合わない。そもそも、天狗の赤と村井の白に挟まれて、まるで源平の合戦に交じり込んだ漁民の体だ。あんなえげつない宣伝など思い付かぬし、思い付いたって出来やしないのさ。うちの煙草なんざ、サッパリ売れないのだ」

これからは宣伝ですかねえと丁稚は解ったような口を利く。
「将軍印煙草は旨いですがな」
「まあ、岩谷天狗は薩摩、サンライスの村井は本拠が京都だ。それに引き換え、僕の雇い主は駿河の出だ。将軍と云うのは権現様のことだからね。所詮官軍には敵わないさ」
お江戸は遠くなりにけりですなあと為三は更に解ったような口を利いたが、この小僧は未だ十七八なのだから、御一新前のことは知らない筈だ。
「まあ、これを機会に身の振り方を熟慮しようと思っているのさ。幸い、親父様の遺してくれた財産があるので、半年喰い繋ぐくらいの余裕はあるのだ」
それが豪儀だって云うんですと為三は云う。正にその通りだろうとは思う。
「手前どもなんか喰うや喰わずで。両の手の爪全部に火ィ燈して、働き詰めです。親方ァ怖いしね」
「それよりお前さんはどうなんだ。その怖い親方に叱られて逃げて来たのかね。それとも、こんな人気のない処にお得意様でもいるのかね。狸くらいしか棲んでいないのじゃないか」
だから越して来たのだ。
帝都の内とは云うものの、それも名ばかり、雑木林と荒れ地ばかりの鄙である。人家がないと云う訳ではないけれど、凡そ書物を買い求める類の人間が暮らす場所とは思えない。
為三は丸顔をくしゃくしゃにして、セリマンでござんすよと云った。

「そりゃあ何だい」
「いやですよ旦那。本探しですわ」
「本は店にあるだろう。何を探すのだ」
　旦那等が注文するじゃあないですかいと丁稚は困り顔で云った。
「そりゃあするけれども」
「うちは、元元本草系の版元ですわ。江戸の頃からそうだったんで、今だって刷ってるのはほれ、植物やら農業やらの本じゃないですかい」
「まあそうだな」
「でも、旦那もそうですが、何でも彼でも注文するじゃあないですか。うちが出してる本の他にも、あれは如何したこれを呉れと、ご注文になるでしょう。他の版元の本だって買うじゃないですか。うちは洋書は扱ってないですが、洋書の注文もあるんですわ」
　それはそうである。
「云われるまでそんなことは考えてもみなかったがな、そりゃあ慥かにそうだ。全体どうしていたんだ」
「版元さんに仕入れに行きますのです。まあ、医学の本なら南江堂さん、漢書なら松山堂さんと、それぞれお得意分野がござんしょうよ。そう云うところに話をつけて在庫があれば分けて貰いますんで。彼方此方廻って、取り次ぎますんで」

「ほう。そう云う横の繋がりがあるのだなあ。考えてみれば当たり前だね。そう云えば、組合も出来たのだろう」
　何年か前に書籍販売組合のようなものが出来たんだと云う話を、斧塚の主人に聞いた覚えがある。
「へえ。丁稚の手前にゃ難しいことは判りませんが、そう云う取り次ぎ仕事が新聞みたいな仕組みになりゃあ、まあ楽になるんでしょうけどねえ。今はね、まだ手前達丁稚が取り次いでますからね。注文されたら草履磨り減らして東京中駆け廻って集めますんで。それがまあ、セリマンで」
　どう云う意味なんだと問うと、それは存じませんと丁稚は答えた。
「まあ、大変です。辻馬車も人力も使えませんからね。俥代なんざ一銭も貰えませんや」
　足が頼りだと丁稚は足踏みをする。
「また、最近の本は重いですからねえ。時に横浜だのまで行くんですわ。横浜は歩いちゃ行けませんけど、それだって、汽車賃は本の値段に乗せられませんからねえ。損です」
「上乗せすればいいじゃないか。手間賃という奴だ」
「いやいや、あっちで十銭、こっちで十銭五厘じゃあ如何にもいけないでしょう。新聞だの手習いだのは、全国何処でも同じ値段で売ってるじゃあないですか。本だけそうはいかないってのはねえ。お客にしてみりゃ間尺に合わないって話で」

「そうだがなあ。まあ、だから組合も出来たんだろうし、変わるだろこれから」
色色変わる。
文明開化とやらも、開くのだか化けるのだかは知らないが、もう開化してから二昔をずっと越し、子供の頃に見ていたような風景は既に何処にもない。いつの間にか異国のような景観ばかりになっている。
「偉い人が考えてくれているのだ。お前さん方が草履を減らすような商売の仕方はやがてなくなるだろうよ」
そうですかねえと為三は桜を見上げた。
「でもねえ旦那、絵草紙やら赤本やら合巻やら、潰れちまった本屋の本やらね、昔の本だって欲しがるご仁はたんといますからねえ。そう云う場合は、やっぱり手前等が走り廻ることになるんで。取り次ごうにも何処に取り次いだもんだか判りやしないですからねえ」
「あ、そうか」
書籍は、大根だの人参だのと違って、幾らでも作れるものではない。版がなくなれば刷れぬし、版元が潰れても刷れぬ。数に限りもあるだろうし、必ず手に入るとは限らないものだ。
「まあそうだな。考えてみれば古本と新本は――別か」
本は本だと思っていた。
へい、別で、と丁稚は答えた。

「別になっちまったんだと、親方は云いますがね。版元と小売りの商売も別だそうですし」
「なる程なあ」
豆腐屋のように、作って売って、作って売ってと云う訳にもいかないのか。
「はあ。刷って集めて、卸して配って、それで売ると、まあそう云う分業の仕組みになるんでしょうな、いずれ」
「それは新しく刷る本の話だね。古い書物はそうはいかないのか。なる程なあ」
道端で小僧に色色教わっている。
そう思うと少し愉快だった。
「で、何だ。お前さんは狸の書いた葉っぱの本でも取り次ぎに来たのかね」
そう云うと、でへへ、と為三は品のない声を上げて苦笑いをした。
「何だ、本当にそうなのか」
「いや、狸かもしれませんがね、知りませんか旦那。その先の」
為三は径の先を指差した。
「本屋」
「ほんやだと。こんな場所に書舗があるのかい。何を刷ってる本屋だね」
「いや、版元じゃあなく本屋です。本屋と云っても、まあ、何とも変な本屋でしてね、色色と面倒臭い品のご注文があった時は、お世話になることにしてまして」

「面倒臭いと云うのは」
　為三は背負子を下ろした。
「まあ、こう云う」
　丁稚は背負子に括られた風呂敷包みを示した。
「何処も扱ってないような本で」
「風呂敷越しじゃ判らんよ」
「へえ。独逸の何とか云う団体の出した小冊子だとか、越後の好事家が江戸の頃に書いた備忘録の写本だとか、聞いたことのないようなお経の本だとか」
「ほう――」
　そんなものが置いてあるのかと尋くとありましたねえと丁稚は答えた。
「当たり前には取り次げないような本でござんすよ。最近じゃ珍本奇本、稀覯本とか云うようですけどもね、そう云う値の張るようなもんじゃあない、屑みたいなもんもちゃんとある。ですからさっきの話で云うと、古本と云うことになるんですかね。古本屋ですかね」
「古本屋なあ」
　顔を向けたが、桜の樹しか見えない。
「ま、手前等みたいな書舗の丁稚には有り難い話ですわ。注文受けても、ないもんはない。でも其処にゃあ」

「大概あるか」
「ありますなあ。ご亭主は偏屈そうですが怒られることもないですし」
「そうか。本屋があるのかね」
　この径の先に。
「失礼ですが、旦那さんは本の虫みたいなお方ですから、当然知っていなさるかと思いましたがね」
「知るものか。最初の一月はずっと床に伏していたのだ。近所の百姓家の嬶におさんどんを頼んで、ずっと寝ていた。床を上げてからも医者通いだ。まあ杞憂だったのだが、何ともないと診断されるまでは心配だろうよ。だから普通に暮らし始めたのはついこの間でね、散歩なんかは今月になってからさ」
　医院へ通うためこの大路は幾度も通ったのだが、それにしたって看板のひとつもないのだから知りようもない。
「いや、この細道は、ずっと行くてえと畑がありまして、それでドン突きはお寺ですよ。門前には花屋だの餅屋だのがありますが、途中に店なんざそうない。だから、見栄えは悪いが、参道なんでしょうなあ。その参道の途中に、ぽつんとね」
「あるのかね」
「へえ。三階建ての、燈台みたいな変梃な建物ですよ」

「三階なのか」
妙な本屋もあったものである。
「上の方に昇ったことなんざありませんからね、一体如何なってるのか判りませんけどね」
「そこはその、気難しい感じかね」
「さあねえ。垣根が高いてぇ気はしますが、別に取って喰う訳じゃありません」
「お前さんみたいな商売人ばかりかい」
そんなこたぁないでしょうやと丁稚は云う。
「まあ銀座辺りの唐物屋なんかよりはずっと入り易いでしょうな。小難しい本もありますけどね、最近の雑誌なんかもあるし、普通の客もそこそこ来ているでしょうな」
「そうかい」
それなら行ってみずばなるまい。
行くんですかと丁稚が問うた。まあ行くさと答えると、オヤしまったなどと云う。
「何がしまっただ」
「旦那さん、うちの店においでにならなくなっちまうでしょうや」
「まあ、近いしなあ」
おいら叱られちまいますと為三は口を尖らせた。
「旦那さんお得意だから」

「いや、お前さんがご主人に云わなけりゃ知れることじゃあない。僕からわざわざご注進に及ぶこともないさ。まあ、仮令ご主人に知れたとしたって、お前さんに聞いたたァ云わないから案ずるこたァないよ。それにね、四谷に出た時は必ず寄せて貰うから、ご主人に宜しく伝えておくれ」
へい毎度ありと為三はハンチングを取って頭を下げ、被り直してからよいしょとばかりに背負子を担いだ。
これから歩いて四谷まで帰るのか。
それなら日も暮れてしまうだろう。荷も重いのだろうし、何だか可哀想な気もする。結構しんどい渡世ではある。立ち話で随分と時間を取らせてしまったし、これで親方に文句でも云われたりしたら夢見が悪い。
そう思ったので、再度呼び止めて僅かばかり駄賃をあげた。
為三は甚く喜び、何度も礼を云って、跳ねるようにして手遊屋の前を過ぎて去った。
姿がすっかり見えなくなるまでその背中を眺めて、もう一度径の先に視軸を投じてみた。
寺も何も見えはしない。横道は細い上に曲がっているのだ。
行ってみようと、そう思った。
どうせ暇なのだ。
その点に関しては高等遊民とでも呼びたくなる程に優雅なのである。

まあ高等でも遊民でもなくて、どちらかと云うと人間は下等の部類であるし、ただ仕事に溢れているだけの身でしかないのだが、それだけに時間だけは売る程にあるのである。

径に踏み込む。

山萩が咲いていた。随分と早咲きである。

上だの遠くだのばかり見ていたから、足許は見ていなかったのだ。綺麗なものである。

半町も進まぬうちに景観はすっかり田舎びてしまった。古びた道祖神でもあればもう山村の相である。

右方の木木が途切れて畑が広がる。畑の向こうには百姓家がある。江戸の情緒なんぞは微塵もないが、文明だの近代だのの欠片もない。何の畑か知らないが、そんなに土地が肥えているとも思えなかった。

畑がまた樹木に隠れて見えなくなる。

納屋だか小屋だかがぽつぽつと木陰に見え隠れしている。

突如赤いものが目に飛び込んで来たので一瞬ぎょっとしたのだが、ちゃんと見れば夾竹桃である。今日は能く能く花を見掛ける日だと思い、見蕩れつつ足を運び、おやと思って左手を見れば、建物がある。

遣り過ごすところだった。

立ち止まって眺めるに、慥かに奇妙な建物である。

櫓と云うか何と云うか、為三も云っていたが、最近では見掛けなくなった街燈台に似ている。ただ、燈台よりもっと大きい。

本屋はこれに違いあるまい。他にそれらしい建物は見当たらないし、そもそも三階建てなど然う然うあるものではない。

しかし到底、本屋には見えない。それ以前に、店舗とは思えない。

板戸はきっちりと閉じられており、軒には簾が下がっている。

その簾には半紙が一枚貼られている。

近寄れば一文字、

弔――。

と、墨痕鮮やかに記されていた。

これではまるで、新仏を出したばかりの家である。尤もその場合は弔ではなく忌であるべきで、つまりは不幸があった訳ではないのだろう。ならば、果たして何のつもりでこんなものを掲げているのか、まるで見当がつかない。呆れると云うより解らない。

またしても為三の云っていた通りである。垣根が高いことは間違いない。高過ぎて裡がどのようになっているのか想像も出来ぬ。果たして店主がどんな人物であるか、そこのところは計り知れぬ訳だけれども、一見客を拒んでいることだけは確実である。

扨如何したものかと躊躇する。

気軽に冷やかして帰れるような雰囲気でないことだけは確実だろう。入店しなければ覗いてみることも叶わず、入店した以上は覗くだけでは済まされまい。否、済まされないことはないのだろうが、如何にも気が引けてしまう。

いやはや厭な店もあったものである。

ならこのまま帰れば良さそうなものなのだが、そう云う気分にもなれぬ。妙に気を引く佇まいである。弔の一字が気になって仕様がない。

達筆であろう。

凝眸していると、板戸が開いた。

隙間から色の白い、瓜実顔の小童が顔を覗かせた。

「おや、お客さんでござんしょうか」

小童はそう云った。

「ああ、まあ、そんなところだ」

「何かお探しのご本でも」

「いや、そう云う訳ではないのだが、本が好きなものでね。何、家が近いのだ。こんな傍に書舗があるとは思っていなかったものだから、覗いてみようかと思ってね」

童相手にもしどろもどろである。

「はあ、お探しの本がお決まりでないようでしたら、当店はお勧め致しません」

「ほう。それは何故かね」

お迷いになるだけでござんす、と小童は云った。多分、この店の丁稚なのだろう。

為三はそこそこ擦れていて、下卑たところもあるけれど、この小僧はどうも種類が違う。顔立ちが綺麗な所為かもしれぬが丁稚には見えない。坊主頭で前掛けをしているから、まあ丁稚に間違いはないのだろうが、何処となく祭礼で見掛ける神社の稚児のような物腰である。

「迷うと云うのは余計に好いじゃないか」

「そうですか」

「そうだ。何ごとも、目的に一直線と云うのは味気ないものさ。彼方に振れ此方に揺れて、時に横道に逸れ、思いも寄らぬ処に出る。そうしたことから知見が広がる。何かと発見もあるものだよ。まあ昨今は合理だの利便だのと盛んに云うが、僕は余り気を引かれないのだよ。世に無駄はないさ」

「あら」

美童は小さな口を円く開けた。

何だと問うと、申し訳ありません等と云う。何を謝るかと尋ねば、

「いえ、手前の主人も同じことを申しますので。世に無駄はない、世を無駄にする者がいるだけだと――」

小童はそう答えた。

「ほう」
出任せの能書きを垂れただけだったのだが、そう悪くもなかったらしい。
「そんなことを仰るかい」
「へい。主人の座右の銘でござんす」
「なる程なあ、で、時に小僧さん、この」
弔と云うのは何だろうと、問うた。
「はあそれは招牌でござります」
「看板だと」
「木片ではありませんので、正しくは看板ではござりませぬが、その、屋号でございます」
「商号なのかい。とむらい、と書いてあるように思うのだがね」
他に読み方はあるまい。
縦から見ても横から見ても弔の一文字である。
小僧は細い眉を歪ませた。
「はあ、手前共の店は——書楼 弔 堂と申しますもので」
「とむらいどう」
これはまた、奇態な名を付けたものである。
商家は縁起を担ぐが相場。開化の世でも合理の徒でも、其処のところは変わりあるまい。

それなのに、選りにも選って弔とは、如何なものだろう。曲がりなりにも縁起の良い名ではなかろう。商売をする気があるとは思えない。
恐ろしげな名だねと云うと、そうでござんしょうかと小童は小首を傾げた。
益々興味が涌いた。
これで覗かずに帰ってしまったのでは延延と後悔が続く気がする。覗いて落胆する分には構うまい。酒宴の肴くらいにはなろうと云うものである。
「どうだね、その、迷う程に品揃えが良いと云う弔堂さんの店内に入れては貰えまいかね。それとも、探書がない客は立ち入り出来ぬ約款かね」
小童はもう一度口を開け、ああ、と声を発した。
「これは如何にも、失礼致しました。何方様でもお入れしない等と云うことはございませんのです」
さあどうぞと小僧は後ろに身を引き、入り口を開けた。
裡は昏かった。
窓がないのだ。
一定の間隔で蠟燭が燈されている。
煤の色も透けているし、燈火も確りしている。
昨今出回り始めたパラフィン蠟燭ではなく、上等の和蠟燭なのだろう。

明かりばかりが朦と見えている。

何処となく万燈会染みている。店の奥行きが解らない。何処か遠くまで、ずっと続いているかのような錯覚がある。

その錯誤も僅かばかりのうちに収まった。間口に較べ相当に奥行きはあるのだけれど、勿論無限ではない。一番奥にはちゃんと帳場のようなものが設えられていた。

左右の壁面は凡て棚で、題簽の貼られた本が堆く積まれている。棚の前には平台があり、そこにも夥しい数の本が積まれている。和書ばかりでもない。洋書もあるようだ。積まずに棚差しされているものも無数にある。洋装本ではなく帙に入れた和本なのかもしれぬ。

目が慣れぬので、書名まではまだ読み取れぬ。燭台を確認し、下を見る。

どうやら、土間のようである。

よたよたと、揺蕩うように進む。

徐徐に周囲の輪郭が明確になって来る。

目が慣れて来たと云うのもあるのだけれど、それだけではないのだ。

蠟燭以外の光源がある。どうやら、真ん中が吹き抜けになっているようである。吹き抜けの真下まで歩を進めて見上げると、うんと高くに白い光が見えた。天窓か何かがあるのだ。

二階も、三階も、書架なのだろうか。

上も本かいと問うと、上も本ですと云う小僧の声が背後から聞こえた。

「上の本も覧られるのかね」

「ご覧になるのは構いませんが、お迷いになるだけです」

「いや、まあそうなのだが、品揃えを覧たいと云うのはあるだろう」

品は揃っておりますと小僧は云った。

「そうなんだろうなあ」

日本橋の丸善などは相当に大きい。一体何冊の書物を取り扱っているものか、考えたこともない。それに較べれば、この店の敷地は遥かに狭い。比べ物にならない程に小さいのだが、本の数は此方の方が多いような気になる。

視軸をゆるゆると下ろす。

帳場の上から錦絵のようなものが下がっている。其処だけ、子供の頃に見掛けた絵草紙屋のような風情である。

「錦絵もあるのかね」

「役者絵芝居絵、春画に瓦版、雑誌も新聞もございまする」

「新聞と云うのは、その所謂新聞か」

「へえ」

そんなものが売り物になるのか。一日一日、日日新しく刷るから新聞なのではないのか。古い刷り物などに価値があるとは思えない。

売れるかいと尋くと欲しがる方がいらっしゃれば売れますと云われた。
「それはそうなのだろうが、その欲しがる人が居るのかいと云う話さね。新聞などと云うものは、読み切り読み捨てじゃあないか。先月やら去年やらの事件の報を今更読んだとて、如何にもならぬぞ」
「読み切れぬ方も、読み捨てられぬ方もいらっしゃいますので」
「居るかい」
「へい。それに、如何にもならぬと仰せでございますが、それを云うなら他のものも一緒でございます。どのご本も、どの刷り物も、読み返したところで如何にもなるものではございますまい」
「まあなあ」
すると。
「この店は、本屋と云うよりも文庫と云うか、経蔵と云うか、そう云うものに近いのかな」
書舗の丁稚が重宝する訳である。
「旧幕時代にも、学問に熱心な藩には書物を集めた文庫があっただろう。西洋には開板された版本を全部お国に納本する制度があるそうじゃないか。本邦にも、ほら、書籍館とか云うのがある筈だ。それに近いのじゃあないのかね」
振り向くと小僧はまた小首を傾げて困ったような顔をしていた。

蠟燭の火燈に映えて、顔色がちろちろと変わる。
「そうした処は、売ってはくれないのではござんせんか」
「まあ売りはしないさ。覧るだけだ。貸してはくれるかもしれぬけれども」
うちは売りますと小僧は云う。
「本屋ですから」
「まあ——そうなんだろうがなあ」
売るのと貸すのは違うかいと問うと、背後から違いましょうと云う声が聞こえた。
慌てて振り返ると、脚が見えた。
帳場の横に階段があり、その中程に誰か立っているのであった。
「お客様でしたか。撓、お客様が見えたのなら、ちゃんと呼ばなくてはいけないじゃないか」
「申し訳ございません」
「いやいや、ご亭主。これは僕がいけないのだ。物珍しくて彼れ此れ尋ねていたものだからね」
脚は段を下り、やがて顔が見えた。
微暗いので能く見えない。
貌は瞭然としないが、身に付けているのは無地無染の白い着物である。白装束と云えば白装束なのだが、どちらかと云うと袈裟を脱いだ僧侶のような印象である。
「何かお探し物でも」

「いや、そうではなくてね。ただ僕は本が好きなのだよ」
「ほう」
それはそれはと愛想良く云って、亭主は帳場に収まり、小僧に向けほら椅子なりお茶なりご用意なさいと云った。小僧は慌てて隅の方から丸椅子のようなものを運んで来て帳場の前に置くと、どうぞと云った。
「いや、構われると気が引ける」
「お時間がおありなら、どうぞご緩寛りしてください」
云われるままに座ると、扨どのような学問をなさいますかと問われた。
意外に若い。
少なくとも老人と呼ぶような年齢ではない。齢下とは思えないのだが、齢上だとして、どの程度上なのか、一向に推し量れない。
「学問はしていません」
「学ぶために読む訳ではないと」
「まあ、勉学の徒ではないのです。思想もなければ主義もない。至って卑俗な凡夫ですよ。ただ、まあ好きなのです」
「何が――でしょうか」
「いや」

本ですと答えた。
「読むのがお好きなのですか。本がお好きなのですか」
「いや――どうですかね」
同じではないのか。
「勿論読むのは好きですがね。本ですからね。余り難しいのは閉口するが、大抵は字が並んでいれば読みます。尤も、横文字は読めませんよ。異国の言葉は馴染まないのです。髷を落して二十と一年、今以て頭の中身は開国していない」
亭主は莞爾と笑った。
「ははあ。しかし、読むだけならば、借りて読んでも一緒でしょう」
「まあそうですな。ただ、貸本屋は最近何処も潰れてしまったでしょう。皆赤本売りなんかになってしまって、もう、それも見掛けないですよ。それに、貸本屋の扱う本はどちらかと云うと下世話なものが多かったでしょう。下世話が悪いとは云いませんが、仏書漢籍、そうしたものは扱っておらぬから、若い頃から余り好きではなかった。曲亭馬琴なんかはかなり読みましたが、数が多いですから」
主は笑顔のまま頷いて、
「仏書漢籍がお好みですかな」
と尋いてきた。

嫌いな訳ではないのだが、好みかと問われると戸惑うよりない。
「いやいや、そこで首肯いてしまうと仏家の方に叱られます。如何せん中身が鎖国で洋ものはサッパリですが、論語なんかは散散読まされましたから、まだそちらの方が馴染むと云うだけです。儒書は時に説教臭くて敵いませんが、本草博物の類は面白く読みます」
「するとお武家様ですか」
「武家の出と云うか、武士の子ではありますが、十歳ばかりで瓦解しましたから、侍と云う自覚はありませんよ。元服するかせぬかで髷を落し、二本差しの重みも知らぬうちに四民平等です。気が付けば武士でなくなってからの方が長く生きています」
もう三十五である。
「まあ、先程申しました通り、何かを学んでいる訳ではなくて、僕の場合は道楽の延長なのですよ。最近では詩歌や小説も読みますし、翻訳ものも読む。この間坪内逍遙を初めて読みました。ま、臀の据わりが悪い不思議な感じでしたが、面白かった」
なる程なる程と主は云った。
「うちは、ご覧の通りの本屋です」
「はあ」
「本の中身を売っているのではなく、本を売っております」
「それはまあ、そうでしょう」

「知見が欲しいのであれば、借りて読もうが立ち読みをしようが同じことです。一読理解しさえすれば、それで済みます。でも、本はいんふぉるめーしょんではないのですよ」
本は墓のようなものですと主は云った。
「墓――ですか」
「ええ。そうですね。人は死にます。物は壊れます。時は移ろい、凡ては滅ぶ。乾坤悉く移り変わり、万物は普く常ならぬが世の習い。しかしそれは現世でのこと」
主は帳場の手燭を翳す。
主の影が背後に広がる。
「この錦絵は――西南の役を描いたものです」
そのようだった。観たことがある。
「私は勿論、戦に行ってはおりません。この絵を描いた絵師も、彫師も摺師も――多分行っていない筈です。これは想像だ」
「そうなのですか」
「ええ。でも、此処に描かれている戦争は実際にあったのです。この通りかどうかは判りませんが、こうだった、とこの絵は云うのです。この絵しか知らぬ私は、西郷吉之助はこんな容貌であったのかと思うよりない」
「まあそうですが、誇張や嘘もあるのではないですか」

「ええ。誇張と嘘だらけでしょうね。何と云っても錦絵ですから。ところで――これは今、博文館さんが準備している本の草稿です。題を『西南戦史』と云い、十二編からなる大部となる予定だそうです。西南の役のことが事細かに記されることでしょう。作者は川崎紫山と云う人で、この人は民権派で知られる東京曙新聞の記者で、他紙から主筆に迎えたいと声が掛かるようなお人ですから、きちんと取材をして書かれています。こちらは如何でしょう」

「如何と云われましても――まあ資料としては、そちらの方が信用出来るものになるのではないですかな」

資料としてはそうですねと主は云った。

「いんふぉるめーしょんとしては、慥かにこちらの方が価値が高いでしょう。でもお客様。これを読んだところで、私は西南の役には加われないのです」

「はあ」

「もう、十五年も前に済んでしまったことですからね。今更西郷にも政府にも加勢は出来ません。これを読んで想像するしかないのです。私にとって西南の役は」

主は手燭を台に置き、人差指で自が顳顬を突いた。

「この中にしかない。それは本物の西南の役ではないのです。謂わば、西南の役の幽霊のようなものです」

「幽霊ですか」

「ええ。幽霊と云うのは神経の作用で、死んだ人が恰も其処に居るように見えるのでしょう」

「まあ、そう云います」

「同じことです。微に入り細を穿ち、知れば知る程、西南の役の幽霊はこの頭蓋の中で輪郭を明瞭にするでしょう。しかしそれは実物ではないのです」

「慥かに、それはそうです」

「私と云う言葉は、私そのものではありません。あなたと云う言葉も、あなたそのものではない。言葉は現世に対応してあるけれども、現世そのものではない。机と云う言葉とこの机は」

何の関係もないですと主は云った。

ぱん、と机を叩く。

「文字も同様です。不立文字の教えを引くまでもなく、文字は記号に過ぎないのです。漢字も仮名も、この錦絵と同じです」

「元は絵、と云うことですかな」

今も絵ですと主は云う。

「具象ではないと云うだけで、平面に描かれた模様なのですから、絵です。ただ、音韻に対応し、意味が載せられている。それだけですな。我我はそれを組み合わせ、言葉として諒解しているというだけのこと」

「うむ」

今まで一度も考えてみたことがなかったが、云われるまでもなくその通りであろう。
「言葉として諒解される絵を、更に組み合わせ、文と云う呪文とし、それを書き連ねて束ねたものが――本なのです」
沢山ありますと主は店を見回す。
あり過ぎる程である。
「言葉は普く呪文。文字が記された紙は呪符。凡ての本は、移ろい行く過去を封じ込めた、呪物でございます」
「呪物ですか」
時に――と亭主は顔を向ける。
「お客様は、お墓参りには行かれましょうかな」
「はあ、信心は苦手で、至って罰当たりな気性なものですからね、仏事法要も怠りがち、墓参もまめには致しませんが、盆や祥月命日には菩提寺に参り、手の一つも合わせますが」
「参られる時は何を思われますか」
「はあ。まあ無心です。亡くなった父や祖父母を想うこともありますが」
「その方方よりも遡ったご先祖様のことは如何ですか」
「それは想いようがありません。知らないのですから。まあ、先祖の武勇伝めいた話は幼い時分に多少は聞きましたから、そうしたことは覚えていますが、顔も声も何も知りません」

「同じことですよ」
主はまたにこりと笑った。
「何がですか」
「墓に向かったあなた様は、お父上や、お祖父様お祖母様のお姿を思い浮かべることが出来ましょう。故人をご存じだからでございます。しかし、故人を知らぬ人には、何も思い浮かべることが出来ますまい」
「それと何が同じだと」
これですと、主は本を掲げた。
洋書のようだった。
「あなた様は外国語が不得手と仰せでしたから、多分この本はお読みになれないでしょう。努力して語学を修められ、読めるようになられたとしても、容易には理解し難いと思いますが」
「いやいや」
まるで解らぬ筈だ。先ず、解ろうと云う気がない。
他人の墓だからですと主は云った。
「見知らぬ他人の墓に参っても、あなた様は何も思い浮かべられますまい」
「なる程。それで墓ですか――」
見渡す。

するとこの店は墓地なのだろうか。

「書き記してあるいんふぉるめーしょんにだけ価値があると思うなら、本など要りはしないのです。何方か詳しくご存じの方に話を聞けば、それで済んでしまう話でございましょう。墓は石塊、その下にあるのは骨片。そんなものに意味も価値もございますまい。石塊や骨片に何かを見出すのは、墓に参る人なのでございます。本も同じです。本は内容に価値があるのではなく、読むと云う行いに因って、読む人の中に何かが立ち上がる——そちらの方に価値があるのでございます」

「中身ではない、と云うことですかな」

「同じ本を読まれても、人に依って立ち上がるものは異なりましょう。どれだけ無価値な内容が書き連ねられていたとて、百人千人が無用と断じたとて、ただ一人の中に価値ある何かが生まれたならば、その本は無価値ではございますまい」

「そうなりますかな」

本は呪物でございますよと、亭主は続ける。

「文字も言葉もまやかしでございます。そこに現世はありませぬ。虚も実もございませぬ。書物と申しますものは、それを記した人の生み出した、まやかしの現世、現世の屍なのでございますよ」

宛らこの家は死屍累累であろう。

「しかし、読む人がいるならばその屍は蘇りましょう。文字と云う呪符を読み、言葉と云う呪文を誦むことで、読んだ人の裡に、読んだ人だけの現世が、幽霊として立ち上がるのでございますよ。正に、眼前に現れましょうよ。それが——本でございまするな」

だから買う人が居ると亭主は云った。

「だから、と申しますと」

「本から立ち上がる現世は、この、真実の現世ではございません。その人だけの現世でございますよ。だから人は、自分だけのもう一つの世界をば、懐に入れたくなる」

気持ちは解る。

「再読、三読するためでしょうか」

「勿論、読む度にそれは立ち上がりましょうなあ。読む度に違ったものが見えるやもしれません。しかし、私が思うに、一度読んだのならば、もう読む必要はない——のかもしれませんな」

「そう——ですか」

「読まずとも観るだけで、観ずとも所有しているだけで、その世界は持ち主のものでございましょうから」

「観るだけでですか」

「ええ。題簽に記された書名は戒名のようなもの。洋装本の背表紙に刻まれているのは墓碑銘でございます。それを観れば、何の墓かは知れましょう」

想うだけで良い、と云うことか。
「なる程。しかしご亭主、所有しているだけで良いと云うのは解り兼ねるなあ。所有するしないは余り関係がないようにも思うのですけれどもね」
いやいや、大事でございましょうと亭主は云う。
「同じ墓に参っても、別の人には別の幽霊が見えているのでございますよ。そうなると——自分だけの世界ではなくなってしまいましょうよ」
「それはそうだが」
「勿論、必ず所有しなければならぬと云う訳ではございません。或る意味で墓など飾り。仏壇も位牌も飾り。不遜な物言いでございますけれど、そうしたものはいずれも信心の契機(きっかけ)に過ぎぬものでしょう。要は心掛けでございますから、参れずとも祈らずとも供養がなるよう、想うだけでも通じるものではございましょう。でも」
主は、どこか愛おしそうな眼差しで棚の書物を見た。
「自分の大切な人の位牌くらいは持っていたいものではございませぬかな」
「はあ——」
「本は、幾らあっても良いもの。読んだ分だけ世間は広くなる。読んだ数だけ世界が生まれましょう。でも、実のところはたった一冊でも良いのでございますよ。ただ一冊、大切な大切な本を見付けられれば、その方は仕合わせでございます」

だから人は本を探すのですと亭主は云った。
「本当に大切な本は、現世の一生を生きるのと同じ程の別の生を与えてくれるのでございますよ。ですから、その大切な本に巡り合うまで、人は探し続けるのです」
そう——なのか。
この中に自分の本はあるのだろうか。
この紙の束と文字の渦の中に、いったい幾つの現世の幽霊が閉じ込められていると云うのだろう。
「見付かるものでしょうかな」
「巡り合えない人もおりましょう。否、出合えぬ人の方が多いと存じます。でも、いずれ読んでみるまでは判らぬことにございますから、読まねば遇(あ)えません。読んで、何かを感得したとしても、もっと上があるやもしれぬ、次はもっと素晴らしいかもしれぬと思ってしまう。これぞその一冊と決め兼ねて、また次を探す。ですから本は、集めるものではなく集まってしまうものなのでございましょうな」
その感覚は解る気がする。
蒐集家(しゅうしゅうか)とは、少し違う。
増やしたいとか、揃えたいとか、満たしたいとか、そう云うものではないのだ。数の問題ではないし、不足がある訳でもない。正に集まってしまうと云うよりない。

「まあ、病膏肓に入るの類には違いないのでしょうけれどもね」
欲が出るのですなあ——と云って微笑むと、主は立ち上がった。
「そう云う人に見付けて欲しくッて、私はここにこうして、屍と、墓石を並べているのでございます」
だから——。
いや少し違いますなと亭主は云った。
「違うとは」
「人のためと云うよりも、本のためかもしれませぬな。いいや、そうなのですよ」
「本のためですか」
主は階段の上を見上げた。
「兎に角読んで戴きたいのです。合う合わないは別にして、合おうが合うまいが、読まれなければこれは芥。誰も参らぬ墓はただの石塊にございます。下に屍が埋もれていようとも、それがどんなに立派な方の屍であろうとも、誰も気付きますまい。読まれぬ本は、只の紙屑」
「いや、まあそうでしょう」
だから売っておりまするると、亭主は云った。
「売るのが供養でございます」
だから——。

弔堂なのか。
「弔っていらっしゃる」
ナァに、私は元は僧でございましてねと云って、主は自が髪をするりと撫でた。
「還俗して随分経ちますがね」
「ご坊でいらしたか」
いや、でも齢は若いのだ。齢上かと思うたが、声の調子は若い。三十そこそこにしか感じられない。いや、若く見えるのも、この異様な舞台の所為なのかもしれぬ。
「お見逸れしました。流石に説教は堂に入っておりますなあ。まあ、僕は何に付け考えの足りぬ男ですから、突き詰めてみたことはないが、ご亭主の云うことは理解しました。本が好きだと云うのは、そう云うことなのかもしれませんな。多少——」
大袈裟に過ぎる気もしたが——。
と、最後まで云う前に、横から小僧の声がした。
「あのう、お茶をお出ししても宜しゅうございますか」
「何だ、撓。そんな処に立っていないで早く出せば良いじゃあないか」
「はあ。お話が終わらないので、出しあぐねて冷めてしまいました」
申し訳なさそうにそう云うと、小僧は茶托に載せた湯呑みをくれた。
そんなに冷めてもいなかった。

「私自身もね、己の本を探しているのです」
「すると――」
未だ見つけていないのか。こんなに――あると云うのに。
主は笑った。
「いやいや、どれもこれも、読んでいる時はこれだと思うのです。思うのですが、もしやとも思う。そこでまた探す。探しているうちに、こんなに増えてしまいましてねえ。こうなると、どれも大事に思えて来て、見失ってしまった。そうしたらこの本達が可哀想に思えて来ましてね」
「可哀想ですか」
「私よりもっと佳い人が居るかもしれないではありませんか」
「はあ」
男女の仲のようですなあと云うと亭主はそうですかなあと笑った。
「死蔵と云う言葉がありますが、これでは正に死蔵です。死したる者には引導を渡し成仏させるが仏家の役目。供養するには売るしかありますまい。だから商売にしたのです。そう云う次第ですから、うちと、他の書舗とは、そもそも成り立ちが違うのですよ」
版元でもないし、取り次ぎをする訳でもないのである。渉猟し、仕入れて並べ、売るのである。否、求める者と巡り合うその時まで陳列しておく――と云うことなのだろう。

大法要ですなあと云った。
「するとご亭主。ここに来る客は、僕のようなぼんくらではなく、明確な目的を持って探書に訪れる、切実なご仁ばかりなのでしょうかね」
「そんなことはございませんよ」
「違いますか」
「まあ、無縁仏を縁付ける、そう云うことも致します。祀る者絶えて久しき古墳墓と祀るべき祖霊が見定められぬ者とを引き合わせてみれば、細い細い縁が繋がっていたと云うこともございます」
まるで売れぬと給金が戴けませんと小僧が云う。
そう云うことですと主は笑った。
もう、すっかり目は慣れ、題簽の文字も読めるようになっている。長長と話を聞かされた所為でもあろうが、慥かに霊廟のようにも見えなくはない。実に整然と並べられている。主は几帳面なのだろう。整理されているから一見綺麗なのだが、能く見れば考えられぬような並びと品揃えである。
どう云う基準の分類であるのか計り兼ねる。湯呑みを小僧に返し、覧させて戴きましょうと立ち上がろうとすると――。
戸が叩かれた。